

でも、聖母マリア像への拍手がきわめて強い。また、アンダルシアのバルには必ず聖母マリアのタイルがあるし、スペインの教会ではマリア像が目立つ。こうしたことから、ファチマやエル・ロッシオー巡礼は、母性原理に支配された巡礼行動ではないかと考えられる。

始めに指摘した個人的-集团的巡礼の次元と第二の父性的-母性的巡礼の次元は、お互い独立というよりは、相互に何らかの関係がありそうである。個人的と父性的、集团的と母性的という対応関係があるように思われる。二つの次元が完全に同じであれば、巡礼行動は一次元で分類可能となるのだが、巡礼形態次元と宗教的な意味合いの次元を同じものと扱うのも、情報を単純化してしまうようで、もったいない気がする。要するに、今のところ資料が十分蓄積されていないので何とも結論を下せない。この点に関しては、機会があれば稿を改めて論じたい。

第三の軸は、祭的-治療・祈願的な次元である。自己完結的 (consummatory) - 手段的 (instrumental) と表現してもよいように思われる。祭的な巡礼は、エル・ロッシオー巡礼だけである。大袈裟に表現すれば、この巡礼の独自性の所がここにある。巡礼者の服装は、男女ともに春祭りの時の正装と同じである。特に馬に乗った男性は、帽子、グレーのジャケット、サスペンダー、縦縞のズボン、皮のブーツ、女性はヒターノと呼ばれる、フラメンコ衣装で、髪には花や櫛を飾り、髪が長い場合には、束ねて後ろにあげている。それぞれのエルマンガドのロッシオーを牛車に乗せ、馬上の巡礼者を先頭に、紙で作った花飾りのある幌馬車、徒歩の巡礼者が続く。聖地に着くまでは野営だが、そこでは、ワインを飲み、ギターや手拍子で歌い、踊るのが習わしである。聖地に着いてからも、各エルマンガドが所有する宿泊所で同様のことが行われ、それはお祭りの雰囲気である。

治療的な巡礼の代表は、フランスのルールド巡礼であろう。不治の病気が治る奇跡が何度も生じたために、巡礼者が数多く訪れるようになった。教会の横には川をはさんで近代的な病院もあり、また治療用のバスルームもある。ここでは現代医療と信仰治療の融合が見られる。また病人ではな

い巡礼者たちは、ルルドの泉の水をポリタンクやら水筒に入れて持ち帰る。聖なる水は病気の治療という意味を持っている。病気を治療するためという、手段的、効用的な巡礼である。ファチマでも、礼拝堂の広場で、礼拝堂に向かって、膝をついて歩く人々がいる。ちゃんと大理石でそうした道が造ってある。日本の神社前での百度参りを連想させる。自己の身体にハンディを課すことで、何らかの祈願成就を願っているのだろうか？ おそらく、エル・ロッシオーで見られる、祭りの楽しさとは対極の、苦痛の世界がファチマでは観察することができる。

また巡礼を商業主義 (コマーシャルイズム) の視点から吟味することも必要であろう。巡礼行動の発生過程は、情動的、経済的、政治的な諸条件と深く関わっている。アイルランド人でビジネスコンサルタントをしている巡礼者に会った。現在はイギリスに住んでいるのだが、ポルトマリンで話をした時に、「巡礼を考えた人は、きっとマーケティングのセンスがあったに違いない」と言っていた。他所から人がやって来ることで、お金は落ち、その地域は潤うからである。筆者自身もどこの聖地においても、営利主義的、商業的な、観光的な側面を垣間見ているので、彼の意見がもっともだとその時思った。この点に関する考察も稿を改めて論じたい。

V まとめ

時系列的な観点から巡礼行動の概念枠組みを示すと図1のようになる。まず巡礼行動へと駆り立てる入力変数があるとすれば、社会心理学的には動機があると考えられる。図には記載していないが、性、年齢、職業、居住地域といった、デモグラフィックな要因や宗教意識、信仰心、自己意識、日常生活でのストレスといった心理的要因が動機を規定していると推定される。次の過程変数には、巡礼中に生起する様々な体験等が含まれる。すなわち、巡礼中に生起する他者との intrapersonal communication、また自己との intrapersonal communication、巡礼路や自然環境との相互交流、そしてこうした過程の帰結としての自己確認、自己強化、自己変容もこの中に含ま